

## 年度最終となる「技術研究発表 & 交流会」

— 話題提供 3 件に加え見学会の報告も実施 —



くる。従来のお香の使い方にとどまらず、インテリアとしても楽しむことができ、焚香時の煙は消臭・抗菌効果も有する。

(3) 紙の素材性を活用し、拡張するフィジカルインタフェースの研究（東京大学大学院情報学環・准教授／寛康明氏）：「デジタル」と「フィジカルな表現・体験・ものづくり」という相反する世界をつなぐフィジカルインタフェースの可能性と魅力について解説。特殊なテーブルトップディスプレイに薄い紙を置くと、その上にだけ別の情報が表示されるシステム、めくる動作によってデジタルの頁をめくることができる1枚だけのフィジカルなデジタルブック、2つの紙コップをセンサーでつなぎ、片方に物を入れて振ると、その振動を紙コップに取り付けたマイクが拾ってもう一方の空の紙コップに伝える触感の再現、さまざまな異素材を和紙の箔糸などとして導入し、新たな機能を付与した西陣織など、ユニークな事例を動画を用いて紹介した。事例に共通しているのは素材そのものが有する質感やユーザビリティをそのまま活かすことであり、寛氏は当たり前のようにフィジカルからデジタルへの流れが進むなか、改めて両リソースを活かし合うような関係の構築が必要であると指摘した。

紙のエレクトロニクス応用研究会（以下、紙エレ研）は3月22日、東京都千代田区の3331 Arts Chiyodaで「第18回技術研究発表 & 交流会」を開催した。

今回は代表幹事の江前敏晴氏（筑波大学教授）欠席にともない、幹事の小杉博敏氏（システムクリエイティブ代表）が座長を務め、下記の話題が提供されたほか、事務局長の藤平亘氏が3月8日に東京大学大学院情報理工学系研究科・川原研究室で実施した「第2回見学会」（本誌4月号にて既報）の報告を行った。

(1) 紙に求めるものとは～紙文具のメーカーとして、名刺の老舗メーカーとして～（榊山櫻 ステーションナリー事業部+ lab 企画室室長／大場敦子氏）：同社のコアビジネスである名刺と、取扱いを開始後7年となるセカンドブランド「+ lab（プラスラボ）」を紹介し、紙を購入し製品に仕立てる立場から「紙に求めるもの」を解説。名刺は主にオフィスユースであることから印刷適性、環境配慮、コストが主要な要素となるが、コンシューマー向けの+ labに関しては素材感、色、コストなどを重視している。例えば一筆箋やメモとして使用する「伝書紙」では名刺用紙はもちろん、手帳に使われる紙、文具用紙、再生上質紙、画用紙、辞書用紙など必ずしも文具向けの紙にこだわらず、デザイナーが自由な発想

で選んだ用紙による8アイテムをラインアップ。所持したり使用することにもなう幸福感、「うふっ」と微笑んでしまうような文具をコンセプトに商品を開発し提供している。

(2) 紙で作った葉っぱのお香「HA KO」について（榊山櫻 営業本部課長／魚住桂子氏、榊山櫻 エージェンシー／林俊美氏）：1893（明治23）年に淡路島で創業した線香・お香メーカーである同社は、1975年に活性炭を主原料とした煙の少ない線香を業界で初めて発売。以降、伝統を大事にしつつ革新的な試みも積極的に行ってきた。その1つが、草や木の粉末を主成分とした従来の線香における木質燃焼時の特有のにおいやタール発生を解消であり、原料臭がなく色・形が容易に細工できる和紙に着目したという。採用にあたっては、①燃焼の持続性、②印刷に適した表面性、③香りを十分に含ませるための厚みの確保、をクリアする必要がある。試行錯誤の結果、通常の和紙には使用しない材料を用いることで、紙および紐のお香を開発。さらにその発展形として、紙エレ研・小杉氏協力のもと、デザイナー・林氏とのコラボによる“HA KO”の商品化にも成功した。HA KOは葉を象ったお香で、和紙にエンボスとデボスを同時にかけるという究極の加工法を採用、職人が手作業で丁寧につ



左から、山櫻・大場氏、薫寿堂・魚住氏、東急エージェンシー・林氏、東大・寛氏、紙エレ研・小杉氏、同・藤平氏